京都本法寺蔵日乾述『神力品講談』について

宮　﨑　英　朋

はじめに

本稿は、寂照院日乾述『神力品講談』について少しく考察するものである。本書は、立正大学日蓮教学研究所による本法寺近世近代文書調査の過程で発見されたものである。影山堯雄編『新編日蓮宗年表』に記載はあるが、過去、紹介されたことはない。本稿では最初に寂照院日乾の略伝を確認し、次に日乾の著述、本書の書誌、本書の内容を検討し、既出の著書との比較を行いたいと思う。

一、日乾の略伝

字は孝順、寂照院と号す。身延山久遠寺二一世鷹峰檀林祖。俗姓は塚本氏、父は越前国（福井県）の士族であったが、故あって若狭小浜（福井県小浜市）に移り、永録三年（一五六〇）ここで生まれた。同一二年、一〇歳で父を喪い、同地の長源寺日欽に就いて出家した。元亀二年（一五七一）、一二歳のときに師範日欽が寂したので、母に伴われて上洛し、本満寺一如院日重のもとで天台三大部を究め、次いで三井、南都に遊学して瑜伽・唯識・律などを学んだ。

帰洛後、天正一三年（一五八五）に二六歳の若さで、本圀寺の学道求法講院（六条檀林）の講主に迎えられ、天台学を講ずる。同院で三〇歳以前に化主（能化）になった者は他に例がなく、この一事からも逸材たることを知ることが出来よう。天正一六年に師範日重の譲りをうけて本満寺一三世の法灯を継承し、当寺の造営に努力を重ねた。

文禄四年（一五九五）九月二五日、豊臣秀吉は新造立の方広寺大仏殿で亡父母菩提のため、諸宗の僧を招いて千僧供養を修する事となった。勿論本宗にも招請があり

宗義制法による他宗同席、謗法供養などの議論から、出仕・不出仕の両派に分かれ、ついに、受・不受両論対立という深刻な宗内紛争を惹起した。このころ日乾は化儀の面では必ずしも師範日重と同調するものではなく、むしろ折伏義をたてて不受謗施を主張していた。

慶長の初め、摂津の国能勢郡の能勢頼次が一族を挙げて日乾に帰依した。このころ当地が旱魃にみまわれ、日乾に雨乞いを修してもらい、効験が著れ、里の民もすべて日乾に帰依するところとなった。そこで頼次は山屋敷南北六町、東西五町（もと真言宗真光寺の廃寺跡）を日乾に寄進した。慶長五年（一六〇〇）三月、頼次はこの地に祖先多田満仲をまつり、日乾の隠居所という名目で一庵を建て、覚樹庵と名付けた。後にこの庵室が発展し、無漏山真如寺となった。また日乾は弟子日然を同地に派遣して、やはり頼次の庇護をうけて慶長六年三月に清晋寺を開創させた。

翌慶長七年一〇月には、後陽成天皇の御下問に応じて『宗門綱格』を上書し、本宗の宗旨を本尊・修行・本期の三段に分けて三大秘法を説き、師範日重の教学体系を明らかにした。

この年の冬、身延山久遠寺の山衆が日重を山主に迎えようと懇請したが日重は固辞して動かないので、高弟の日乾を屈請した所、日重は許可したという。時に日乾は本満寺山主で四三歳であった。身延に在ること一年、翌八年には辞して京都に帰った。慶長一三年、常楽院日経の法論事件に当たっては、告文一紙を幕府に捧げ本宗の危機を救っている。一四年には再び屈請されて身延に住した。身延では毎年三月二八日、立教開宗の日を立正会と称して論議を行った。この立正会の堅義の式を整えたのが日乾である。身延在住六年、五五歳で身延西谷の庵室に隠居し、元和三年（一六一七）の春、摂州に遊化して能勢の覚樹庵にいたり、四年間をここで過ごした。

徳川家康の側室養珠院は、駿府城艮位の鎮護として松野村にあった日持の遺跡を静岡に移し、元和四年一一月九日に開堂供養を行い、貞松山蓮永寺と号した。次いで日乾を招いて当山七世、中興の祖と仰いだ。同九年、心性院日遠に後を譲り能勢に帰った。寛永四年（一六二七）には本阿弥光悦一門の屈請をうけて、京都洛北鷹峰の地に学室を開き、知見院日暹に講筵を張らせ、鷹峰檀林、常照講寺の開祖となった。

翌年池上日樹ら関東諸山が不受不施義を唱導すると、法弟日遠、その弟子日暹らと共に受不施義をたてて対抗

し、江戸に留まること三年におよんだ。身池対論の結果、日樹らの不受不施義が邪義と採決され、それぞれ配流された後同七年に幕命で京都妙覚寺に晋董した。しかしここも一年間住してまた能勢に帰庵している。また美濃の国大野部清水村の村主林丹波守宗雲が伝教大師の旧趾と伝えられる天台寺院を改めて法性山覚林寺とし、その開山に迎えられた。

このような特筆すべき化跡は、宗門内外から高く評価され、師範日重、法弟日遠と共に宗門中興三師と崇敬される。寛永一二年一〇月二七日七六歳をもって本満寺で入寂した。

二、日乾の著述

『日蓮宗宗学章疏目録』によれば、『安国論私』一、『花厳筆記』一、『教誡律儀抄』一『薬王品御談』一、『宗門綱格』二、『要文集』一、『三日講論議』一〇、『宗旨雑記』二、『西谷名目条箇』三、『書捨草』二、『一筆草』一、『破奥記』一、『謗施受用論』一、『宗門大意』一、『延山宝物録』一、『法隆寺聞書』一、『台当要文集』一、『六物図聞書』一、『四分戒本私記』一、『論議故実』一、『妙経抄』四、『当家本尊事』一、『御書見聞』一、『元祖化導譜』一、『小善成仏』一『法華和註大意』八、『円頓者秘訣』一、『雑録』一、『十種供養式』一、『宗祖開扉式記』一、『諷誦章』一、『消息』二、『与僧那院書』一、『消息』一、『同』一、『同』一、となっている。

また、望月歓厚先生の『日蓮宗学説史』によると、『宗門綱格』（慶長七年）・『宗旨雑記』（寛永四年）・『当家本尊事』・『法華和註大意』・『破奥記』・『謗施受用論』・『三日講論議』・その他、とある。

このうち刊行されているのは、『宗門綱格』（慶長七年・明暦三年・寛政四年）・『宗旨雑記』（天和二年）である。『宗門綱格』・『宗旨雑記』の刊本は立正大学を始め、多数現存している。

三、本書の書誌

本書は、縦26.6cm×横19.2cm。本文九七丁に、別筆による序文と表紙が付けられ、一冊に袋とじにされている。

修補表紙

巻頭一行目（一丁オ日乾直筆）

「神力品　元和三五月十一日於本満寺記之」

巻末（九七丁オ日乾直筆）

「神力品　寛永八年辛未十月四日立

為高祖三百五十年忌報恩
於本満寺一七日法用行之
一高祖御事不珍本化上首上行菩薩御
再来也」

表紙（別筆）
「察長出洛節予預置候然今年安永
第五申五月十六日示滅畢依之而此書不計而
感得焉
今主中村檀林新文句
安永五年丙申
察長日法
五月十六日去
後見之衆徒壱返之唱題希所也
南無妙法蓮華経　義長
日東〈花押〉」

序（別筆）
「此是乾師御作自筆也元和三年者
延山再住御退山年四年目也御
歳五十七才時也尓来百十八年目朽捨本中
取出之奉拝見之
寛永八年者御年七十二才時也尓来
百四年目享保十九甲寅十月五日拝見之
当年者乾師百年忌処従捨本中拾得
之事不思議也」

本書は、日乾自らが冒頭に述べているように、元和三年に京都本満寺で記された講述書である。しかし、その内容は「法華経」の講釈にとどまらず、実に多岐多様にわたっている。

本文には署名花押はないものの、他の諸本と比較して、日乾の自筆であることはまちがいない。

四、本書の内容

本書は、巻頭に神力品の「爾時仏告上行等菩薩等」の文が記されており、そのために「神力品」と題が記されている。実際の内容は、神力品結要付嘱の文の解釈に事を寄せて、五義三秘・宗教宗旨について述べたものである。全体の内容構成は次の通りである。

1、神力品結要付嘱の文の標挙（一丁オ）
2、当宗の宗旨宗教「三大秘法と五綱の標挙」（三丁オ）
3、五義の教について（三丁ウ）
4、時について（四四丁オ）

5、機について（四六丁オ）
6、国について（四八丁ウ）
7、教法流布前後のこと（五〇丁オ）
8、修行論　成仏論　題目功徳論（五一丁オ）
9、宗旨三ケ（本尊論）（八七丁オ）※法本尊の立場に立つ。
10、奥書（九六丁ウ）
11、高祖の御事（表題のみ）

このように本書は、五義三秘について日乾自ら書いたものであるので、日乾の教学を知る上では非常に重要な位置を占める著述であるといえる。

五、三大秘法の説示　―『宗門綱格』との比較―

本書の特色の一つとして三大秘法の説示を挙げることが出来る。今節はこの問題に絞って検討してみたい。日乾の三秘論といえば、言うまでもなく『宗門綱格』を挙げることが出来る。渡邊寶陽先生は『日蓮宗信行論の研究』のなかで、日乾は『宗門綱格』において三大秘法の内、戒壇を「本期」と置き換えて、一致派の理戒壇説を更に敷衍し一般化しようと試みている、と解説される。即ち、本期とは我々が成仏する浄土＝寂光土をいうのであり、そこに至る修行の過程は上求菩提下化衆生の実践にあるとし、四土に約すれば、同居・方便・実報の三土が事土であるのに対し、寂光土は理土であって、唯だ仏と仏とのみが真に理解できるような広き境界であるという。仏は衆生をして、寂光土に至らしめようとするのであって、それに比べれば安養浄土の如きは同居の浄土、兜率天は同居の穢土であって、それらはすべて仏の施設（方便）であるとし、この寂光土に到達するためには何よりも上求菩提下化衆生の菩提心を修行の根本精神とすべきである、と日乾はいう。要するに、『宗門綱格』においては、本門の三秘は「本尊・題目・本期」とされている。しかし、本書は後陽成天皇献上のため、曲げて、「本期」としたとの批判もある。ところが、『神力品講談』をみると

一付二当宗一有宗旨宗教八ケ習宗
旨本体肝要所弘法也此有二三ケ一
謂本尊題目戒壇也此云宗旨三ケ
三大秘法一也宗教五ケ弘二宗旨
三ケ一教門有五ケ一合八ケ也例宗
旨如二人常住一屋舎一宗教為屋
舎一門堀構一如也五ケ者教機時国

教法流布、前後也云々（三丁ウ）

とあるように「本尊・題目・戒壇」と明確に述べている。ここで推察できることは、秀吉の千僧供養における不受派の不出仕の際、仏性院日奥が後陽成天皇に上書したことに対して生じた日蓮宗に対する朝廷の不信感を和らげる為、『宗門綱格』においては「本期」という表現となったということである。しかし、その十五年後に記された『神力品講談』では、「戒壇」の語が明瞭に用いられていることが確認できる。

おわりに

以上、京都本法寺所蔵の日乾述『神力品講談』について微細なる考察を加えた。本書は日蓮教団における法華経講義史の一端を跡づけるものと思われる。

今後は、以前から継続的に検討している日乾寺の中興三師の事跡・数学に加えて、その弟子の知見院日暹と三師との関連性を究明していきたい。

参考文献

『草山集』宙之五「蓮永寺日乾伝」　平楽寺書店
『本化別頭仏祖統記』「第二十一代寂照院日乾上人傳」　京都本満寺
『新編日蓮宗年表』　影山堯雄編　日蓮宗
『身延山史』　身延山久遠寺
『日蓮宗学説史』　望月歓厚著　平楽寺書店
『日蓮宗信行論の研究』　渡邊寶陽著　平楽寺書店